

研究ノート

脱走兵はどこへ向かうのか
——舞鶴「逃兵二哥」における人の移動と空間の転換——

李 星雨

はじめに

第1節 兵營の誕生——監視と処罰

第2節 人の移動と空間の転換

第3節 混在郷なのか、理想郷なのか

むすびに

(要約)

本稿は、舞鶴の短編小説「逃兵二哥」における、人の移動と空間の転換について分析する試みである。一連の空間のあり様について考察し、空間と規律・訓練的な権力との関係について検討した上で、脱走兵である次兄の行方について新たな解釈を提示した。

はじめに

本題に入る前に、舞鶴¹の「逃兵二哥（次兄の兵役脱走）」（1991）の内容を紹介しておきたい。語り手である「ぼく」の視線と記憶を通して、逃亡したり逮捕されたりする、次兄の果てしない脱走兵としての人生と、軍隊体制に対する抵抗から妥協へと、姿勢を変えてきた「ぼく」の軍中生活とが交錯する二重構造のなかで、ストーリーは展開する。しかし、「ぼく」と次兄——理想的な「ぼく」——のイメージが重なることで、そうした二重構造はラストにおいて次のように瓦解する。

ある夜、すでに除隊し、再び日常生活に戻っていた「ぼく」は、現代都市の迷宮を通り抜けて、脱走兵である次兄の愛人・「姉さん」のねぐらを訪ね、長期間音信がなかった次兄と対面する。そして1年後、「ぼく」は自ら失踪を画策し、次兄をねぐらから解放しようと夢見て、再びそのねぐらへと足を運ぶ。ところが、そこには次兄や「姉さん」の姿は見えず、電気鍋が1つ残されているだけであった。次兄はどこへ行ったのだろうか。次兄は結局連行されたという「定論」を、「ぼく」は想像するが、「姉さん」の番号、ねぐらの様子、次兄の「秘語」、すなわち謎の言葉といった奇妙な要素の組み合わせは、その「定論」を打破し、次兄の行方に関する新しい可能性を示唆しているように筆者は考える。

本稿では、舞鶴らしい作風の「処女作」として、実験性の強さから²、論じることの難しい「逃兵二哥」をとりあげ、数度にわたる逃亡に伴って発生する人の移動、および空間の転換を読み解く。その上で、次兄の行方について新しい解釈を提示してみたい。

第1節 兵營の誕生——監視と処罰

兵士の逃亡の起点はいうまでもなく兵營である。しかし兵營とは何だろうか。

1975年、ミシェル・フーコーは『監獄の誕生——監視と処罰』（1975）において、「監獄」という権力的装置について解剖すると同時に、軍隊、学校、病院などの組織にも言及した。フーコーによると、「規律・訓練」、すなわち「身体の運用への綿密な取締りを可能にし、体力の恒常的な束縛をゆるぎないものとし、体力に従順＝効用の関係を強制する」³という方法に基づく兵営や監獄は、「《従順な》身体」⁴を鍛え上げるための施設である。また、その規律・訓練的権力は、「規格化をおこなう制裁」、「階層秩序的な監視」および「試験」といった道具の組み合わせによって成功を掌中に収める、とフーコーは指摘する⁵。

権力が如何に人びとを規律・訓練し、従順な肉体を造り出すのかについては、「逃兵二哥」においても丹念に綴られている。そこで、フーコーの監獄論に照らして、兵営生活における規律・訓練がもたらす痕跡を観察し、その描写の意味を浮かび上がらせてゆきたい。興味深いことに、脱走兵である次兄が終始逃亡中のため、兵営の様相はつねに「ぼく」の視線を通じて現れてくる。

まず、規律・訓練的施設においては、時の流れは線分に分割され、いずれの線分も試験で終わる、とフーコーは語る⁶。「ぼく」の軍での生活もやはり、新兵訓練センター、山麓の部隊、海岸の単位という3つの段階によって分割されている。そのうち新兵訓練センターにおいて象徴性あふれる場面が1つ描かれている。

汚れた眼鏡を放棄すべきか、それともよく見える目を大事にすべきかわからなかった。だが、ぼくはとっさに目を下に向け、手を伸ばして眼鏡をつかんだ。と同時に、このトイレの溝はぼくの尊厳のようなものをぶちこわした⁷。

「秀才兵」と呼ばれた「ぼく」は、入隊するまで、文学の象牙の塔で理想的生活を味わっていた。文学人生の記号としての眼鏡の神聖性を守るために、新兵訓練センターの溝式トイレで、「ぼく」はいつも屈む前に眼鏡をはずしていた。しかし一度、眼鏡が溝のなかに落ちたことがあった。その瞬間、汚れた眼鏡——汚れた理想を放棄し、理想の純潔を保つべきか、それともよく見える目——確かな現実に立脚すべきかをめぐって「ぼく」は躊躇する。このふたつの選択肢は、権力への抵抗や臣服という、異なる態度を意味する。この選択は「ぼく」にとって1つの試験だった。結局、「ぼく」は大便のなかに落ちた眼鏡をすくい上げ、答案用紙を新兵訓練センターに渡す。「尊厳のようなものをぶちこわ」すとともに、新兵訓練の試験に合格したのである。

新兵訓練を卒業してまもなく、「ぼく」は山麓の部隊へと移動する。数日後、美麗島事件の勃発に伴い、部隊は緊急状態となった。政府側の判決に対して、「ほんとうに了見の狭い政府だ、栓で無理やり人の尻の穴を塞ぎやがる」⁸と激しく批判したため、「ぼく」は「思想に問題のある人間」という烙印を押される。この「ぼく」の思想にはどのような問題があるのだろうか。フーコーは、「規律・訓練上の刑罰の対象になるものは……逸脱である」⁹と指摘している。「ぼく」が兵営中の問題分子と認定されたのは、「確たる証拠」や「慈悲深い政府」の判決という「規則」に対して、異なる見解を示したためである。兵営は逸脱を許さない場所だった。こうして、警備義務からの解除をはじめ、一連の処罰が「ぼく」に下されると同時に、規律・訓練的権力もより

いっそう強く強制される。

フーコーは「規格化をおこなう制裁」について、「規律・訓練的な施設の……刑罰制度は、比較し差異化し階層秩序化し同質化し排除する。要するに規格化するのだ」¹⁰と解釈している。「ぼく」の逸脱した発言に対する処罰も、この道具が機能した結果と思われる。危険発言により、「ぼく」はサイレント・マジョリティの群から選別され、規格外へと配属される。そうした「ぼく」を再び規格化するには、一連の「規格化をおこなう制裁」が不可欠である。兵士という身分の剥奪によって、兵営の最下位へと投げ込まれることで、「ぼく」は最初の制裁を受けたのであった。

「奴に銃を持たせないのは、兵士の神聖な使命を履行できるような兵士にさせないためだ。兵士らしからぬ兵士とは、人ですらないと言ってよい。」兵士らしからぬ以上は、兵士らしからぬ仕事、トイレや野菜畑の臨時働きをさせるしかない¹¹。

この連隊長の訓示には、兵営内部の「分類化・階層秩序化・序列の配分」¹²という特徴が余すところなく見られる。「兵士らしからぬ兵士」と位置づけられた「ぼく」の階層は、一般兵士のみならず、同じく問題分子とみなされている悪党兵にも及ばない。一般兵士の仕事はもちろん、悪党兵の職務であるトイレ管理もできず、最下位の臨時働きしか認められない。「扉には『将校専用』の四文字が、赤いペンキで大書してあった」¹³というように、兵営では仕事の種類も用品のレベルも兵士の階層に比例する。

処罰の目的はまた、罪の償いにとどまらず、「本質的には矯正感化的でなければならない」¹⁴。「ぼく」が警備義務を解除され、トイレ掃除工、野菜畑の水肥工および豚舎掃除工を兼任していたのは、罪を償うためでなく、処罰を通じて「ぼく」を再審査するためである。規律・訓練の権力がとくに「訓練——強化され、多様化され、いくどもくり返される習得——の次元に属する処罰」¹⁵を重視する。新兵訓練センターでの経験を確認すると、この点がより明確になる。3種類の臨時工の共通点は、「便」との接触である。新兵訓練センターの溝式トイレと異曲同工の効果——「尊厳」の破壊——を狙っているといえよう。

もう1つ注目したいのは、「掛け布団は豆腐の硬さが標準だった」¹⁶という軍隊内の規定である。掛け布団の硬さが豆腐であろうとマントウであろうと、兵士の日常生活に与える影響はわずかだが、マントウのような硬さの掛け布団は、軍隊体制に対する挑発となる。持ち込んだ手作りの掛け布団がマントウの硬さだと判定されて何度も処罰を受けた「ぼく」は、ハンガーストライキをおこなったが、上官から、「思想に問題がないなら、マントウか豆腐かが問題になるはずはない」¹⁷、また「ハンガーストライキはまさしく思想問題だ」¹⁸との訓示を受ける。掛け布団と思想問題は如何に結びついているのだろうか。兵営という規律・訓練的施設では、処罰の網を編み出すように、「規律・訓練の装置の有する一見些細な要素にも処罰機能を付与する」¹⁹ようになるという。掛け布団の硬さが思想問題になるのは、このメカニズムが機能した結果である。ある兵士が規格外のものとされると、兵営は処罰の網になり、些細なものを含め兵営内のすべてが訓練になる。

「階層秩序的な監視」も不可欠な道具である。規律・訓練的施設の典型である兵営では、「階層秩序化された監視の空間的な重ね合わせ」²⁰を介して、軍隊全体が階層によって分割されると同時に、各階層それぞれが互いの視線の下で行動する。兵営が1つの透明な装置へと姿を変え、権力による取り締まりが強力に実施されるのである。

まず上から下への監視を見てみよう。「思想問題分子は一人だけで一つの仕事を担当することはできない。常にペアになった人間の管理監督下におかれる」²¹。つまり、兵営の最下位へと投げ込まれていた「ぼく」が、トイレ掃除という臨時工を担当する際には、トイレ管理人である悪党兵の監督を受ける。ただし監視はこれで終わらない。一番手の検査員、すなわち悪党兵も、「検査成果を検査しに不定期でやってくる上級の二番手の検査官」²²の監視下に置かれている。こうした連続的で機能的な、階層秩序化された監視を通じて、規律・訓練の権力とその目標との内的関連が構築され、規律・訓練の効果を高められているのである²³。

一方、下から上への視線も存在する。日増しに重くなる処罰の苦しみに耐えられなくなった「ぼく」は、思想問題を避け、矛先を処罰的な体操と豚舎に向けることで、精神的な問題を物質的な問題によって取り繕おうとする。「豚舎は思想改革に好適の場所です」というスローガンを掲げ、規律・訓練の成果を示すことで、「ぼく」は「正式の養豚エンジニア」に抜擢されるが、同時に、「きみが見たこと、考えたこと、聞いたことを、ぼくたちの参考までに報告」²⁴するよう求められる。つまり「ぼく」は「細胞」——密告者へ転身を果たしたのである。一連の情報を「ぼく」は私信の形式で上に報告し始める。このように、元々監督者の役割を果たしていた人びとが、被監督者の「ぼく」から監視を受ける。監視の網の目が織り出され、この監視網に基づき、規律・訓練的権力は兵営という「総体を《保持》させ、相互に支えあう権力的な影響を総体のすみずみにまで及ぼす」²⁵。

フーコーは「試験」について、「階層秩序的な監視」と「規格化をおこなう制裁」の結合物であり、連続的に客体としての人間、またその人間が制裁のなかで変化する過程を可視化させることで、その人間を規格化の列に復帰させる儀式だと指摘する²⁶。小説にもどり、「試験」の場面の1つを確かめてみる。

まず声を正して気をつけの姿勢を取らねばならん、よき軍人というものは軍人らしくなければならん、庶民のフリなんぞしてどうすると怒鳴り、それからズボンのポケットを臨時検査した。この臨時検査の重点は、なにか反政府宣言や国家転覆の陰謀計画やらが書いてあるかもしれない文書やピラを探すことにあった……何かを見つけると、すぐにそれを地面に放り捨て、腹ばいになって拾わせた²⁷。

政治作戦長官からの臨時検査は、フーコーのいう「試験」の一種に違いない。まず、この検査は階層的な監視網の一環である。最下位の「ぼく」は、外部から内部、すなわちポケットの裏側まで、強制的に上級の政治作戦官の視線のなかに晒されることで、可視化された客体となる。次に、こうした監督のなか、良き軍人の姿勢、あるいは文書やピラのないポケットという基準にも

とづき、姿勢の正しさや思想の純潔さを示すよう、さまざまな制裁がおこなわれる。「試験」の連続性と不定期性を通じて、規律・訓練的な権力は客体が規格化される過程を検閲する一方で、客体に対してつねに途切れることのない監視と訓練をおこなう。最後に、「ぼく」が長官の視線の下で制裁を受けたように、この「試験」は権力の誇示で締めくくられる。

以上、規律・訓練的な施設の典型である兵営では、「規格化をおこなう制裁」、「階層秩序的な監視」および「試験」といった道具の組み合わせを介して、規律・訓練的権力は隅々まで浸透し、従順な肉体の群れを作り出す。では一連の処罰を経て、「ぼく」は規律・訓練的権力の暴威に屈したのだろうか。

密告者になった「ぼく」は職務を全うし、細かに見聞きしたことを記録する。この仕事によって「ぼく」は連隊長の信頼を取り戻し、規格内に復帰し、良き軍人の象徴物——銃を胸にかかえることができるようになった。しかしこれだけで「ぼく」が規律・訓練により規格化されたとは言いがたい。密告者への転身という帰順行動は、日々の処罰を避けるために「ぼく」がおこなった偽りの降伏に過ぎない。再び規格化の列に配属され、行動上の自由を獲得した「ぼく」は、兵役を脱走する。しかしこの脱走は、「ぼく」が規律・訓練的権力に屈し、徹底的に自我を失い従順な兵士になる転換点でもあった。この点について、脱走の過程とあわせて見てみよう。

ぼくは山の中腹の一メートル四方たらずの平らな岩のうえで三泊四日した。二度ミカン園に下りてミカンを食べた。平らな岩の縁の岩肌から溪谷の水が滴りおちていて、ぼくは蔓の茎を口に入れ、その水で飲みこんだ。軍営で炊事の煙があがるのが見えた。厨房ではこの溪谷の水で、鶏肉を煮ていた……三日目の朝……朦朧とした眠気のなかで、ぼくは呆けたように向かっていた——自分の駐屯地へと²⁸。

3日目の朝、「ぼく」は自発的に兵営にもどり、短い脱走を終える。この脱走に織り込まれた、食事と蚊をめぐる挿話には、兵営の規律・訓練的権力の痕跡が隠されている。「ぼく」はミカンと溪谷の泉という天然の食物を口にしたが、鶏肉料理やマントウのような人工的な食物を渴望する。蚊に刺されたことによる腫れと、文明生活を代表する蚊取り線香との対比も同様で、規律・訓練と結びつけてみると、苦しい生活と安易な生活——制裁と恩恵の対比がある。これについてフーコーは、「規律・訓練における処罰は、恩恵＝制裁の二重の体系の一要素にほかならない」²⁹と指摘している。密告者へ転身した後、「ぼくのマントウは、豆腐と評定されだした」³⁰、また「『発言が必要なのは権利であり義務である』ことを享受も負担もしない唯一の兵士となった」³¹というように、「ぼく」は権力の恩恵の甘美さを味わい始めていた。鶏肉やマントウに象徴される安易な兵営生活をおくることで、「奇形知識分子」という病身から良き軍人というたくましい肉体へと脱皮した。そのため、ミカンや泉の水が提供できる養分では、良き軍人の肉体を支えるに十分でなくなっていた。つまり、「ぼく」の肉体はすでに従順な肉体になっていたのである。

「ぼく」は軍隊／体制に対して不満を持ち、反逆の台詞を繰り返し述べたものの、最終的に兵営へと帰らざるをえなかった。「ぼく」の兵役脱走は、「霊」と「肉」の力比べとみなすことがで

きる。兵営生活は「ぼく」の肉体を良き軍人としてのそれへと改造すると同時に、しだいにかつての反逆思想を抑制していった。たった一度の脱走において最後の抵抗をおこなうが、「ぼく」の反逆思想は鶏肉とマントウへの渴望のなかで雲散霧消した。つまり、「肉」はこの対決において勝利を勝ち取ったのである。

兵営にもどった後、「ぼく」は脱走ではなく規律違反だけを問われ、軍法会議には移送されず、3週間司令部に収監された後、海岸の単位へと送られた。こうした寛大な懲罰は、つねに「体制の寛大さ」の恵みと解釈される³²。しかしこれはむしろ、「ぼく」が脱走の失敗を通して山麓の部隊の「試験」に合格したことへの褒賞と呼ぶほうがよいだろう。訓練が完了したので、厳しい懲罰はすでに必要なくなっていたのである。海岸の単位へと移動した「ぼく」は残りの兵役に服し、抵抗のない歳月を過ごす。

以上をまとめると、脱走兵である次兄が逃げ出そうとする対象は、逸脱を許さない場所、規律・訓練的な施設の典型としての「兵営」である。そこから逃げてはじめて、従順な肉体へと転落し「味気ない人生」をおくるといふ、良き兵士の宿命から離脱できる。では、兵営から逃れた次兄は一体どこへ向かったのだろうか。

第2節 人の移動と空間の転換

イプセンの代表劇『人形の家』(1879)の終盤で、ノラは自分がもはや人形でなく完全に自由になったと宣言し、扉を閉じて去る。魯迅は講演「ノラは家出してからどうなったか」でこの場面について、ノラが「人形の家」とその束縛から解放されたという通俗的解釈を否定し、彼女は外に潜むさまざまな危機に直面し、その「羽」は麻痺するかもしれないと指摘し、「ノラには実際、墮落するか、さもなければ家に帰る、という二つの道しかなかったかもしれない」³³と述べた。つまり、ノラの家出は、物語の終結——束縛からの解放を意味してはいない。

人びとを束縛するのは空間そのものではない。ノラを脱走兵に、「人形の家」を兵営に置き換えると、同じ結論が出てくる。脱走兵の行動も、兵営の桎梏から解放され、いわゆる「自由」を取り戻した象徴とは言い難いのである。従順な肉体へと転落した「ぼく」はその一例である。「どんな長征でも、ハンターはいつも股座にくっついてきて、どこに短期滞在したところで捕まえようと狙っている」³⁴とあるように、軍隊体制の影は時々刻々と背後に匍匐してきて、脱走兵を再び飲み込もうと画策している。「人形の家」／兵営の影が迫ってくる以上、ノラ／脱走兵は何らかの対策をとっておかなければならない。「逃兵二哥」では、人の移動、また移動に応じて変容しつづける空間の構築が、そうした対策として構想されている。一連の空間イメージは次兄の足跡にしたがって次々と立ち現れてくる。

1. 最初の港——わが家

物語は、「入隊して四か月後が旧正月の休暇だったが、彼はそのまま軍隊には戻らなかった」³⁵と、次兄による初めての兵役脱走において幕を開ける。最初の脱走における次兄の目的地は、非

常に素朴かつ無意識な選択で、わが家だった。

わが家は極めて日常的な空間である。人びとはそこで日々をおくるのはもちろん、病院という空間が出現する以前には、人びとはつねにそこで生命を獲得したり死を迎えたりしていた。そうした空間は家族と繋がりを織りなす場でもある。建築の構造や家族の構成など、人びとはつねにわが家の構造を熟知しているが、同時にわが家は私的で閉じられたプライベートスペースでもある。外部にいる人がこの空間に入り込むには、家族の許可が必要である。

こうした家の性格は、次兄が家に隠れる可能性をもたらすとともに、軍隊のハンターが彼を探す際に、最初の目標となった。35日と9時間後、次兄は「二階の窓から隣家のスレート屋根に飛び降りるつもりだった」³⁶が、階段でハンターに足の脛をつかまれ、最初の脱走の幕を閉じる。「ぼく」に向かって、次兄は以下のように話した。

新婚ほやほやで妊娠していた妻が心配でさえなかったら、自分から玄関に出るなんて間抜けなことはしなかったろう、ハンターが階段に足をかけたときには、とっくに瓦屋根伝いに道路に飛び降りていたはずだ³⁷。

わが家にもどり日常生活に復帰しても、次兄は警戒心を解いていない。それは、ハンターへの対策ないし逃げ道について、次兄が早くに想定し何度も練習していたことからうかがえる。しかし前述のように、わが家は人間関係の集合体の一種である。わが家にもどると、最も始原的な人間関係、すなわち家族との日常的かつ緊密な絆のなかに身を置くこととなる。そうした人間関係は「新婚ほやほやで妊娠していた妻」に対する関心として示される。人間関係——妻との繋がりは、ハンターが次兄の所在を確認するための重要な手がかりであり、次兄の完璧な計画のなかで唯一の手抜きでもあった。妻がいなければ、次兄はわが家に帰らなかったかもしれない。また妻への特別な気持ちがないと、ハンターが玄関のベルを押し、妻の許可をもらってこのプライベートスペースに入り込もうとする前に、彼は逃亡していただろう。

一見無関係に見えるが、こうした人間関係もひそかに規律・訓練的権力に結びついている。フォーコーによれば、規律・訓練的権力は、人間の多様性の秩序化を確保し、個人の場所を定め、個人を「観察状態」に置き、限りなく緊密な網の目により一般化する³⁸。現代社会を「監視の社会」として再構築するのである。このように、人びとにとって家は一望監獄のなかの「独房」にすぎない。家族との繋がりは人びとの状態を確認＝監視する「称呼番号」にほかならないのである。社会倫理という規格に合うよう、次兄が良き夫としての使命感を身につけていたように、家庭内部の諸関係にも規律・訓練的権力は影響を及ぼす³⁹。つまり、現代社会において人びとはいつ、どこにいても規律・訓練的権力の支配下にある。

それでは、失敗の経験を経た脱走兵の次兄は、現代社会という規律・訓練的権力の網の目のなかで彷徨う際に、続いてどのような空間に身を委ねるのだろうか。

2. 公園・動物園／寺／廃屋・空き家・建築中の家／劇場

再び軍隊を脱出した次兄は、「公園の小さな動物園」へと視線を向ける。小説のなかに公園・動物園の構造あるいは風景に関する描写はない。だがそうした空間は、わが家とはまったく異なる、他なる空間である。フーコーによると、規律・訓練の支配下にある現代社会では、「さまざまな地点や要素間の隣接関係」⁴⁰、またその隣接関係に基づく規律・訓練的権力に包囲されると同時に、逸脱しつつある空間——混在郷が存在する。

〔混在郷は、〕具体的に位置を限定されているにもかかわらず、すべての場所の外部にある……混在郷とは、互いに相容れない複数の空間ないし指定用地をひとつの現実の場所に並置させる力をもつ……庭園とは世界のもっとも小さな部分であると同時に世界の完成体である。それはギリシャ・ローマ期の時代より、幸福で宇宙的広がりをもつ混在郷なのである（動物園の由来も同様である）⁴¹。

公園・動物園は混在郷の一種である。公園では多種多様な植物が季節や地域の境を越えて植えられ、大自然に擬した池、築山などの「装置」が設置されている。人びとはそうした空間を歩いて、景色を楽しみつつ、現実生活で蓄積された重苦しさから解放される。すなわち、日常生活あるいは状態から逸脱するため、他なる空間としての公園に向かってゆく。動物園も同じような役割を持つだろう。さまざまな動物が小さな空間に集められ、現実世界と関連すると同時に現実世界を乗り越えた、もう1つの「世界」を構築している。

混在郷は良い隠れ家ではあったが、「公園の小さな動物園」も次兄にとっては楽園ではなかった。「ハンターはベビーカーを追跡し、公園の小さな動物園の柵のところで若い父親を捕縛した」⁴²とあるように、規律・訓練的権力の支配から逸脱した空間に隠れたにもかかわらず、次兄は再びつかまる。しかし次兄が捕縛されたのは、「柵」という混在郷と外部世界との境界線に逗留していたからというより、むしろ再び結ばれた人間関係——ベビーカーの踪跡、そして妻子との面会の結果だといったほうが適切だろう。妻子と面会せず、多くのホームレスの一人として公園を彷徨っていたら、彼の身元は判明しなかったかもしれない。既述のとおり、「称呼番号」としての家族との繋がりに接触すると、再び規律・訓練の監視下に置かれるのは不変の運命である。

捕まってからわずか4日後、次兄はワシのように兵営を飛び越えて、3度目の脱走を開始し、6年近く続く「長征」の途につく。そうしたなか、彼は「大きな寺のうしろの修行僧のねぐら」（以下、寺）に一時的に足をとどめようとした。

実に冬は暖かく、夏は涼しかった。油や塩、米や味噌といった生活必需品はもちろん、丹薬をつくる炉もあった。悲惨だったのは、深夜に木魚をねぐらで、ポンポコポンポコやることだった。彼はそこに足をとどめ、腰をすえて丹薬をつくり道を修めようとした⁴³。

寺は規律・訓練的装置の1つである。僧侶はさまざまな戒律を厳格に守り、「時間割」にしたがっ

て日々の活動を繰り返す。夜更けに響く木魚の音はその1つの象徴だろう。しかしながら、「丹葉をつくる炉」の存在は、ここが別の空間でもあることを示唆する。丹葉をつくり、道を修めるために、僧侶は世間のもろもろの情欲から離れなければならない。また僧侶以外の人びとは、人生の苦痛と現実世界の苦難から逃れ、幻のような幸福を祈ろうと寺に赴く。寺は混在郷の一種ともみなすことができる。

次兄はこうした空間にすっかり満足し、浮き世を離れてここで生きようと決意する。しかし、「ある日、尼僧に米をねだったとき、春の取り締まりだとかで二日後の朝、戸籍の調査に山に登ってくる人がある」⁴⁴と耳にし、次兄の甘美な夢は水泡に帰す。ここでも外部の規律・訓練的権力の侵食を食い止めることはできなかった。これまでとは異なり、身元の判明という危険をもたらす要素は、家族との繋がりとという始原的な人間関係でなく、より幅広い人間関係の集成である戸籍へと変わっている。

戸籍制度は規律・訓練の道具——「試験」の一種と考えられる。「試験は個々人を、監視の分野の対象に加える一方では、^{エクリチュール}書記行為の網目のなかで把えもするわけである。個々人をつかまえて定着させる部厚い記録文書のなかに入れるわけだ」⁴⁵とフーコーが指摘するように、戸籍制度を通して個人情報と地域的人間関係が一目瞭然になり、地域社会も可視化される。脱走兵人生をおくっている次兄にとって、身分登記や移転登記はもちろん不可能である。もし戸籍調査を受けようになると、寺の戸籍に所属しない次兄は、身分不明の外部者として扱われるだろう。この場合の身分不明とは、身分が暴露されることを意味する。自己申告を選ぶか、調査によって受動的に暴露されるか、2つの道しかない。身を引かなければ、彼を待っているのは兵營の審判にほかならない。

このように、家族との接触を絶ち、寺という混在郷に隠れていたにもかかわらず、次兄は規律・訓練の影から逃れることができなかった。それは混在郷の基本的な特徴——混在郷の存在は結局現実世界との繋がりに基づく——による結果である。こうした空間はそれ以後の軌跡においても登場する。3度目の脱走において次兄は「廃屋・空き家・建築中の家」（以下、廃屋）に短期的に滞在する。公園・動物園、寺と同じく、廃屋も1つの混在郷である。

蚊が多く、尿の臭いがたえず流れてくるのさえ別にすれば、自由気ままに薬用ドリンク酒を楽しみ、夢の中では美女がいっぱいた⁴⁶。

廃屋以外の世界が変貌しつつある一方、廃屋内部の空間はあたかも時の流れから取り残された孤島のようにみえる。時間が停留し、家屋は荒廃しており、また建築作業が中止されたままである。実際の場所によって外部世界と結びつくと同時に、ある意味、外部世界と互いに対立し、抵抗するこの空間は、1つの「時間停滞的な混在郷」⁴⁷ともいえよう。

廃屋と外部世界の比較に関しては、侯孝賢の映画『風櫃来の人（風櫃の少年）』（1983）においても見事に表現されている。映画の脚本に基づき、その比較を確かめてみる。

それは、完成していない空き家だった。丸裸の窓の外にはネオンの看板が一枚あるだけだ。明かりが明るくなったり暗くなったりして部屋に差し込み、ときに青くなったり、紫になったりする。阿清は窓まで突き進んで外を眺めてみる。高樓が万丈にして平地に起き、遠くないところに高雄港がある。〔明かりが〕千本万本あり、赤いものと緑のものがあり、岸辺の灯と水中の影も雑然と混ざり合っている⁴⁸〔拙訳〕。

「窓」という境界線により、「空き家」と「丸裸の窓の外」はまったく異なった世界のように区切られ、対立している。色とりどりの現代の都市風景は、ネオンの看板、林立する高樓およびにぎやかな港の組み合わせによって姿を現している。一方、廃屋内部は外界から切り離され、他なる空間となっている。しかし「逃兵二哥」では、廃屋にあっても完全な自由を獲得できなかった。葉用ドリンク酒と夢のなかの美女の存在のおかげで自由な楽園のように見えるにもかかわらず、ここには人（社会）の痕跡——尿の臭いが残っているためである。「いつも用心して尻をきれいにしていないといけないが、そうしていれば股座の臭いを追いかけ続けてくるハンターを招き寄せないですむ」⁴⁹とあるように、尿や股座の臭いという人の痕跡、すなわち現実世界との繋がりは、行方を明らかにする足跡である。そのため次兄は前進するしかない。

興味深いことに、映画『風櫃来の人』で阿清が空き家を訪れたのは、そこがボルノ映画を放送するプライベート映画館だと騙されたからである。「丸裸の窓」を劇場・映画館の舞台・スクリーンとみなせば、そこでは高雄の都市発展史の「ドキュメンタリー」がたしかに上演されている。廃屋が一軒の劇場・映画館となるのである。奇妙なことに、次兄はまさに「妻の実家からそう遠くない小さな劇場」（以下、劇場）で逮捕されて、3度目の脱走を終える。

国産のカンフー映画と西洋の恋愛映画が二本立ての小さな劇場は、冬の午後でも多くの男性観客がいた。恋愛映画が終わり灯りがついたとき、次兄の左右にも前後にも、ハンターが冷笑しながら座っていた⁵⁰。

劇場も混在郷の一種である。劇場・映画館という特別な空間では、古今東西にわたる物語が継続的に上演されており、周辺世界に対する「模擬」、あるいはまったく異なった世界を展示している。人びとは現実世界を離れるため、劇や映画を観に行き、方法としての「観賞」を通じて別の世界を見つめ、その内部に潜りこみ、ひいては自分を登場人物に置き換え、全身全霊で登場人物の喜怒哀楽を体得する。

ウディ・アレンの名作『カイロの紫のバラ』（1985）の不思議なストーリーを通して、劇場・映画館のこの機能について考察してみたい。ヒロインのセシリアは、平凡な日常生活と情熱のない婚姻から一時的に逃れようと、毎日映画館に通って映画「カイロの紫のバラ」を繰り返し鑑賞する。ある日、不思議な出来事が発生する。その映画の主人公がスクリーンから降りてきて、スクリーンのなかにある別の世界へとセシリアを誘う。劇場・映画館で劇や映画を楽しむとき、人びとは1つの別の空間に身を置いていることをこのシーンは示している。

しかし、劇や映画はやがて終わりを迎える。『カイロの紫のバラ』では、映画の放映が終わった後、「カイロの紫のバラ」の主人公が本来の位置、すなわちスクリーンへもどるとともに、セシリアは何も変わらない現実生活に直面せざるをえない。次兄も似たような体験をしている。映画が放映されているあいだ、次兄は現実世界とのあいだに距離を取り、映画の世界へと入り込み、そこに安住していた。しかし「恋愛映画が終わり灯りがついたとき」、彼はやむをえず現実世界にもどり、再び現実世界の間人関係（妻の実家）と結びつく。と同時に、ハンターたちによって編み出された罟、すなわち規律・訓練の網目に落ち込んだのだった。

3. 溪谷の岩壁の下／静浦の海辺

3度目の脱走において、次兄が2つの特別な空間——「溪谷の岩壁の下」（以下、溪谷）と「静浦の海辺」（以下、海辺）に身を寄せる経験は注目に値する。なぜ特別かという、これらの場所はわが家のような日常的な空間ではなく、かといって混在郷に分類することもできない空間だからである。

まず、溪谷に目を向けてみる。日常的空間に属さない溪谷に逗留することで、人びとは文明から離れて自然に還ろうとする。野外キャンプはその一例だろう。しかし溪谷は混在郷でもない。溪谷は川の流に浸食されたり、風に彫り込まれたりした自然空間であり、「社会組織自体のなかにデザインされた」⁵¹空間ではない。海辺も同様である。人びとは遊びや休憩のため短期間だけ滞在する。こうした空間で次兄は次のように時間を潰す。

静浦の海辺に数日とどまっていたが、ある日の朝、海を見ていると、突然、安平の牡蠣炒めを食べたくなった。それですぐに出かけて戻ってきた。牡蠣炒めと牡蠣スープを食べると、映画の券一枚分だけ金が残った。静浦の手前で、溪谷の岩壁の下でひと夏を過ごした。金はまったく使っていない⁵²。

溪谷にしても海辺にしても、この生の軌跡において核となるのは「金」である。「金」とは、財貨の交換に基づき、何度も進化し定式化された媒介物であり、人と社会とを結びつける。溪谷では金を使うこともなかった、すなわち人や社会と結びついていなかったため、炎天下のなか次兄は穏やかに夏を過ごすことができた。故郷安平の料理——故人との繋がりが再び思いに浮かぶと、彼は金のかからない海辺から離れて、故郷へと向かう。そこで金を使って牡蠣炒めと牡蠣スープを食べ、また金を妻に渡す。と同時に、再度接続された人間関係の網の目が彼を捕獲する。

以上のとおり、兵營を脱出した次兄は一連の空間に身を委ねるが、無意識の選択であるわが家、現実世界を超越した混在郷、あるいは人間社会から切り離された自然空間は、いずれも次兄にとって理想の楽園ではなかった。規律・訓練の影は現代社会の隅々に潜伏し、脱走兵の心につきまとった。どこかで人びとや社会との繋がりを完全に断ち切らない限り、規律・訓練の支配から解放されることはない。

「ぼく」の脱走兵人生とあわせてみると、この点はよりいっそう明らかになる。脱走するとき、

「ぼく」は無意識的に山下へと向かい、社会にもどろうとするが、ふと、「自分は『鋼鉄』の軍隊を離れ、こうして『だらしのない』群衆のほうに戻ったのか」⁵³と自問し、転身して山の中腹へと赴く。ここで登場する『『だらしのない』群衆』とは、人間社会を指すのだろう。たしかに、次兄の逃亡の旅を傍観することで、「ぼく」はすでに兵役脱走の精髓——一望監獄のような人間社会の渦中から身を引くこと——を悟ったのである。一連の挫折を味わっていた次兄も、この秘密を嗅ぎ出したようだった。4度目の脱走の途につく際には、彼はひっそりとこの世界から姿を消す。

第3節 混在郷なのか、理想郷なのか

従来状況とは異なり、4度目の兵役脱走では、次兄の踪跡を知る者は誰一人いない。義姉の依頼を受けた「ぼく」は、「兄さん、新聞を見たらすぐに連絡を」という短い尋ね人の広告を出す。ある深夜、「……あなたの兄さんに会いたいなら、台北に来てここに電話をかけて……」⁵⁴という内容の電話が、約束どおりにかかってきた。深夜という時間帯や、女性の独特の話し声、および簡潔なメッセージが織りなす電話は、まるで幻想のようである。その面会について、「ぼく」の妻は「美人局」ではないかと疑うが、この唯一の手がかり以外には選択肢がない。

ぼくは電話の指示に従って、マッサージサロンをたずね、二二番さんをさがした。「ここには二二番はいないわよ、女の子は十八人だけよ」と言われたが、暗闇の中で、なまめかしい声がした。「私が二番よ」⁵⁵。

謎めいた女性はなまめかしい声を介して姿を現す。二二番から二番への番号の転換に注目したい。真実の番号——二番と、虚構の番号——二二番との混乱は、情報伝達上のミスではなく、この女性による意図的な誤りと思われる。真実と虚構のあいだに揺れ動く女性は、最初の関門とみなされる。つまり、次兄の秘密の楽園への「道」は、訪問者の身分が確認された場合にしか開かない。「ひとめ見て、あなたが同じお腹から出てきた人だってわかったわ」⁵⁶と言われた通り、「ぼく」と次兄の顔が似ていたことで、この関門の鍵を手に入れたのである。

「姉さん」は「ぼく」を連れて、大通りと路地によって構成された現代都市の迷宮のなかを行き交う。マッサージサロンを起点に、いくつかの大通りと路地を通過した後、「ぼく」はようやく現代都市の幾重にもわたる鉄筋コンクリートの真中に隠れた、次兄の秘密の楽園——賃貸のワンルームマンションに到着する。その楽園は次のように描かれている。

十坪の大きなワンルームは、不揃いな集合墓地のようで、モノがこちらにひと山、あちらにひと山と積み上がっていた。次兄はその墓のあいだのベッドに胡坐をかいて座り、体からは二ガウリのような臭いがした⁵⁷。

このワンルームも混在郷の1つである。まず、ここを集合墓地とする見方は注目に値する。フーコーによれば、墓地とは、数多くの闇の住居によって構成された「もうひとつの町」であり、日常の文化的空間に比べて異質な場所——混在郷である⁵⁸。この集合墓地——闇の町にあって、次兄は青ざめた顔をした、土葬されたばかりの人のようだった。「自分の心臓の音なんか都市の鼓動のなかで消えてしまう」⁵⁹というように、彼はすでに「他界」していたといえる。また、この空間自体、「姉さん」のねぐらという「閉ざされた家」⁶⁰である。「閉ざされた家」について、「混在郷は、現実空間、つまり人間が囲い込まれているあらゆる指定用地が、実は幻想であることを告発する幻想空間を創造する役目を担っている」⁶¹とフーコーは指摘する。「姉さん」のねぐらに閉じこもっていた次兄は、外部にある現実世界をある種の幻影へと再構築していた。愛人と同居することで、彼は現実世界にある家庭という共同体を壊し、良き夫のイメージを覆した。のみならず、次兄の身体の状態もある種の象徴である。顔が浮腫んで、胸の肉も少し落ちていた次兄の身体から、「ぼく」の「奇形知識分子」の肉体まで遡ってゆくことができる。いずれも良き軍人のたくましい身体に対する抵抗といえるだろう。外部世界にある規律・訓練的権力の影が幻影へと変貌したため、次兄の身体もしだいに解放されたのである。

ところが、そうした空間への再訪と対比させた場合、新たな見方もできる。1年後、「ぼく」は再び「姉さん」のねぐらへと足を運ぶが、秘密の楽園から二人は去ってしまっていた。彼らはどこへと移動したのか。「ぼく」は次のように次兄の行方を想像し、小説もここで唐突に終わる。

姉さんに死ぬほど焦がれた客がいて、こっそり姉さんの住まいまで尾行した、その数時間後にハンターがやってきてドアを、ドンドンドンドン叩いた……次兄はすぐにドアを開けて、そのまま出ていく、ハンターどもは尻のあとから並んでついてこい……⁶²。

「姉さんに死ぬほど焦がれた客」、すなわち人間社会との繋がりにより、混在郷は解体した。と同時に、次兄も再び現実世界に落ちこみ、規律・訓練の一望監獄のなかに曝された。つまり、次兄は結局兵営へと連行されたのである。しかしこの想像は唯一の解釈なのだろうか。「姉さん」の独特のあり様——二番と二二番、すなわち真実と虚構のあいだに揺れ動く身分——と結びつけて考えれば、「姉さん」のねぐらという空間を理想郷の1つとみなすことができる。

フーコーは理想郷について、現実世界との繋がりにもとづく混在郷と対比させ、実際の場所をもたない非現実空間であると定義する⁶³。ストーリーをふりかえってこの空間を再考してみる。「姉さん」のねぐらという設定には、魏晋南北朝時代の詩人・陶淵明の『桃花源記』の投影が色濃く反映されているのかもしれない。『桃花源記』は、失われた理想郷を求めても得られない、という物語である。漁夫は小川に沿って桃花の林を通り抜け、山に隙間を見つけ、山と岩のあいだを彷徨い、ついに外界と断絶する理想郷——桃源郷にたどり着く。そこに住まう人びとの生活は外の世界から完全に逸脱している。しかし再び訪ねようとしたとき、小川の流れの向きが変わり、桃源郷への入り口も消えてしまっていた。

これに対して、「ぼく」は二番／真実の「姉さん」にしたがって、「無数の芋虫のように頭をう

ごめかすコンクリートの森⁶⁴を通過し、賃貸のワンルームマンションに到着し、次兄と再会する。1年後の再訪では、「姉さん」は姿を消すとともに、次兄の世界への「扉」も閉じていた。「ぼく」の奇妙な見聞は、『桃花源記』の現代版といってもよい。換言すれば、「姉さん」は小川や隙間のような機能を発揮しており、番号の変更によって真実と虚構のあいだを行き来している。二番と自称するとき、「姉さん」は真実の人間であり、彼女のねぐらも混在郷である。一方、二二番へ転身を果たすと、彼女も幻のような存在となる。その場合、ねぐらは現実世界との繋がりを徹底的に切断し、理想郷へと変貌してゆく。「ぼく」もその繋がりの一種でありながら、その空間に入り込む権利を失う。以上に加えて、現実世界に残された「タケノコと豚肉の匂いがする電気鍋」も顕著な例である。「逃兵二哥」においては、牡蠣炒めと牡蠣スープに始まり、マントウと鶏肉を経てタケノコと豚肉に至るまで、いずれも人間社会と密接に関連する人工的食物であり、また規律・訓練的権力の象徴物でもあった。

以上からすると、次兄は逮捕されず、ある理想郷へと逃亡したともいえよう。同時に現実世界との繋がりを一切拒否することで、彼はようやく一望監獄——現代社会における規律・訓練の支配から解放されたのである。なお、「その秘語の世界に入ってしまうと、二度と戻ってこないのだ……」⁶⁵と彼が吐露したように、その理想郷とはおそらく「秘語」、つまり謎の言葉の世界だと思われる。「他人は聞いてもわからない、わからなければ秘密も漏れない。漏れる心配がないから、すきなときにすきなことをしゃべる、自由のある日々はよいもんだ」⁶⁶と、次兄は酔っ払った際に「秘語」について説明した。「秘語」は軍事刑務所生活と深く関わっているために、それは言語の層にとどまらない意味を帯びている。

言語はアイデンティティとも関連する。『想像の共同体』（1983）において、ベネディクト・アンダーソンはその関係について次のように示唆する。

恋する者の目——彼または彼女が生まれもつあの特定のふつうの目——、これにあたるのが愛国者にとっての言語——いかなる歴史の経緯によってか、彼または彼女の母語となった言語——である。母の膝の上で出会い墓場にて別れるまで、その言語を通して過去が蘇り同胞愛が想像されそして未来が夢みられる⁶⁷。

「母語となった言語」は、人びとが「生まれもつあの特定のふつうの」言語であり、それは生の旅を貫く。言語を通じて人びとは他者と交流しつつ、「同胞愛」を生み出し「想像の共同体」を構築する。このような人間関係は規律・訓練の基盤である。対して、「ふたつとないもので、いくらでも変化する」⁶⁸という「秘語」は、いわゆる反言語にほかならない。次兄が母語を棄て、この「秘語」を編み出すのは、他者と交流するためでなく、他者への隔絶を示すためである。言い換えれば、ある共同体への融合でなく、ある共同体への拒否を目指すのである。集合墓地のようなねぐらで、次兄は母語、そして過去の自分と訣別した。「秘語」の世界へ身を寄せるとともに、その世界の唯一の住民になり、人間関係という「負債」から逃れることで規律・訓練の攻囲から逃げ出した。すなわち、自由をつかみ取ったのである。

むすびに

ここまで、人の移動と空間の転換について考察することで、脱走兵である次兄の逃亡の路線図を描き出してきた。

その起点は間違いなく兵営である。しかし逃亡の対象は兵営にとどまらず、規律・訓練的装置として機能する「兵営」であり、ひいては従順な肉体に転落するという兵士の宿命である。現代社会へ引き返した次兄は、次の真相をつきとめたと思われる。現代社会は規律・訓練の支配下にある一望監獄にすぎない。ある意味、規律・訓練から逸脱する混在郷に停留しても、人間関係に接触すると、再び規律・訓練的権力の罠に落ち込む。そこで、次兄は理想郷へ向かうという最終的な方向を確定した。「ぼく」と再会すると同時に別れを告げ、ひっそりとこの現実世界から姿を消した。彼は「秘語」の世界——彼の「自分ひとりの世界」に安住したのである。

注

- 1 作家。本名陳国城。1951年台湾台南生まれ。代表作は『拾骨』(1995)、『餘生』(2000)など。
- 2 ここでいう「舞鶴らしい作風」と「実験性」とは、晦渋な文体と圧迫感のあるテーマが入りまじるといものである。舞鶴「初版後記」(『悲傷』麥田、台北、2001年、248頁)を参照。
- 3 ミシェル・フーコー [田村俣訳]『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社、1977年、143頁。
- 4 同上書、143頁。
- 5 同上書、175頁。
- 6 同上書、161-162頁。
- 7 舞鶴 [三木直大訳]「次兄の兵役脱走」『植民地文化研究』第20号、2021年、190頁。中国語原文に基づき修正をおこなった。以下同様。
- 8 同上書、191頁。
- 9 フーコー、前掲書、182頁。
- 10 同上書、186頁。
- 11 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、192頁。
- 12 フーコー、前掲書、187頁。
- 13 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、192頁。
- 14 フーコー、前掲書、183頁。
- 15 同上書、183頁。
- 16 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、193頁。
- 17 同上書、193頁。
- 18 同上書、193頁。
- 19 フーコー、前掲書、182頁。
- 20 同上書、176頁。
- 21 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、192頁。
- 22 同上書、192頁。
- 23 フーコー、前掲書、180-181頁。
- 24 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、194頁。
- 25 フーコー、前掲書、181頁。
- 26 同上書、188頁。
- 27 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、192-193頁。
- 28 同上書、201-202頁。
- 29 フーコー、前掲書、184頁。
- 30 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、194頁。

- 31 同上書、194 頁。
- 32 李娜『舞鶴台灣——舞鶴創作與現代台灣』麥田、台北、2015 年、71 頁。
- 33 魯迅 [松枝茂夫訳]「ノラは家出してからどうなったか」『魯迅選集』第 5 卷、岩波書店、1956 年、130 頁。
- 34 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、200 頁。
- 35 同上書、189 頁。
- 36 同上書、189 頁。
- 37 同上書、189 頁。
- 38 フーコー、前掲書、218-227 頁。
- 39 同上書、216 頁。
- 40 フーコー [工藤晋訳]「他者の場所——混在郷について」『ミシェル・フーコー思考集成』第 X 卷、筑摩書房、2002 年、277 頁。
- 41 同上書、283-284 頁。
- 42 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、191 頁。
- 43 同上書、200 頁。
- 44 同上書、200 頁。
- 45 フーコー、前掲『監獄の誕生——監視と処罰』、192 頁。
- 46 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、200 頁。
- 47 フーコー、前掲「他者の場所——混在郷について」、284 頁。
- 48 朱天文「風櫃來の人」『最好的時光——侯孝賢電影記錄』山東画報出版社、濟南、2006 年、17 頁。
- 49 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、204 頁。
- 50 同上書、195 頁。
- 51 フーコー、前掲「他者の場所——混在郷について」、280 頁。
- 52 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、195 頁。
- 53 同上書、201 頁。
- 54 同上書、198 頁。
- 55 同上書、199 頁。
- 56 同上書、199 頁。
- 57 同上書、199 頁。
- 58 フーコー、前掲「他者の場所——混在郷について」、282-283 頁。
- 59 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、200 頁。
- 60 ここでいう「閉ざされた家」とは、ルイ・アラゴンの長編小説『バリの農夫』に登場する「特別許可の家」、すなわち「娼家＝売春宿」である。フーコー「ヘテロトピア」（[佐藤嘉幸訳]『ユートピア的身体／ヘテロトピア』水声社、2013 年、48 頁）を参照。
- 61 フーコー、前掲「他者の場所——混在郷について」、286 頁。
- 62 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、205 頁。
- 63 フーコー、前掲「他者の場所——混在郷について」、280 頁。
- 64 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、204 頁。
- 65 同上書、203 頁。
- 66 同上書、203 頁。
- 67 ベネディクト・アンダーソン [白石隆・白石さや訳]『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』リポロポート、1987 年、263 頁。
- 68 舞、前掲「次兄の兵役脱走」、203 頁。

(2022 年 10 月 14 日投稿受理、2023 年 5 月 2 日採用決定)